広島に揚がる真鯛の系統に関する一研究

三 善 清 旭

(水産講習所)

A Study of the Stock of *Pagrosomus major* (T. & S.),

Landed at Hirosima.

Kiyohide MIYOSI

SYNOPSIS

Pagrosomus major (T. & S.) landed at Hirosima can be classified into two groups, A and B, of the scales of which, the first winter rings are different in structure from each other as shown in Fig. 1.

曩に王⁽¹⁾は広島市場に陸揚げされる真鯛について、六・七月の候を界として年齢組成に著しい違ひが顯はれ、加之も體長に於ても特に7歳以下では此候を界として著しい相違が認められるので、五月以前のものと八月以後のものとは系統が違ふのではなからうかと述べた。海老名⁽²⁾は系統が違ふと豫想される瀬戸内海産(広島縣)と外海産(宮崎縣)の真鯛の鱗に於ける冬輪を比較して、内海産の鱗に於ては何れも明瞭な冬輪を現はし、外海産に於ては多少程度の差異があるが何れも不明瞭な冬輪を現はして居ると述べた。これから内海産の真鯛でも系統の異なるものは鱗の輪層の構造上に何か多少の相違が認められ得ることが豫想される。

著者は以上の觀點から、1936年の四・五月と八・九・十月及び1937年の三・四・五月と八・九・十月に広島市場に陸揚げされた内海産と思はれる真鯛(體長40cm以下のもの、これは約7歳以下に當る)總數292尾に就て、鱗の輪層の構造及び第一冬輪形成時の計算體長を比較して觀た。

鱗の第一冬輪の幅の割合に狭いもの(第1圖A)と第一冬輪の幅の割合に廣いもの(第1圖B)の2つの群に資料を分類し、第一冬輪形成時の計算體長(l_1)は體長の測定された227尾に就て王⁽³⁾に倣つて $l_1 = \frac{v_1 - \varepsilon}{V - \varepsilon} L$ で計算し(此場合 $\varepsilon = 1.1$ mm)、又年輪が略、確實に數へられた201個の個體から王⁽⁴⁾の方法で成長曲線を求めた。第2圖に五月以前と八

第1圖 擴大×3.8

A: 年齢Ⅱ 體長17cm

B: 年齢Ⅲ 體長22.5cm

(1), (3), (4) 王 貽觀: 瀬戸内海に於けるマダヒの stock に関する一二の知見 日本水産學會誌, 6 (4), 昭和十二年十一月。

(2) 海老名謙一: 真鯛の系統に関する研究 瀬戸内海と外海産(宮崎縣)との比較(豫報) 日本水産學會誌, 6 (4), 昭和十二年十一月。

年	月	Aの割合	Bの割合	個体数
1936	4~5	76.5	23.5	17
"	8~10	69.0	31.0	100
1937	3~5	83.5	16.5	73
"	8~10	75.5	24.5	102

第2圖
上・下・A群・B群の個体の割合
第一冬輪形成時の計算體長の度數分布

月以後の兩時期に於ける A 群及び B 群の個体の割合 (%) 及び A 群及び B 群の l_1 の度數分布圖を、第 3 圖に A 群及び B 群の成長曲線を示す。

これによると、廣島に陸揚げされる眞鯛では、(i) 五月以前と八月以後とでは A 群と B 群との混合の割合は多少違ふが、一方が A で他方が B 群と云つたやうに分れてはゐない。(ii) A 群と B 群とでは體長に相違が認められない。従つて現在取扱つた鱗相による 2 つの型は、王の想定した系統に適合はしないが、極く初期に於いては生育の條件の違いから起る 2 つの系統であつたことは疑なからう。

終りに御指導を賜りたる田内森三郎博士、體長・體重の測定及び採鱗をして下さつた梶山英二氏に衷心よりの謝意を述べる。

第3圖 成長曲線